立教大学 社会福祉ニュース

第5号 昭和47年7月20日発行 編集発行人 早坂泰次郎 東京都豊島区西池袋3 立教大学社会福祉研究所

社会福祉研究所と私

副所長　早　坂　泰次郎

今回は所員の一人一人が上の主題でConfessionをしようということである。

主題について語ろうとするときに問題になるのは、「社会福祉」ということばと「研究」ということばとをどう理解するかである。

「社会福祉」ということばは私にとって「人間の幸福」ということばとおなじである。この点は岩井さんが元気だったころ、口角泡をとばせて論じあったなかで、たがいに確認しあったことでもあった。いいかえれば、それは社会福祉を考える場合、ある人々がまっさきにとりあげる（とりあげるべきであると主張する）政策、制度、組織、体制などの問題を人間の幸福のための手段にすぎぬと考えることである。政治意識過剰（ということば自体に反撥する人々が多いかもしれない）の現代においてこのようにいうことは、ノンポリとか心理主義とかいう批判を浴びがちなことは百も承知の上でのことである。そうした批判に対しては、ノンポリは反ポリではないこと、心理主義という批判のレッテルは、しばしばそれ自体がある決定論を前提としていることを一言答えておこう。

何年か前に、あるケース・ワーカーの集まりで、私がケース・ワークを専門職として制度化することについて、原理的には関心がないと言ったのはその意味であった。この意見をのべたことで私はケース・ワーカー諸氏から激しい不満と反感を受けたらしい（間接的にきこえてきたのでこういうほかはない）が、私は今でも同じ意見である。社会福祉を人間の幸福と考えるかぎり、そのための専門家などが本来必要な筈はないではないか。「そんなことなら常識だ。そんなわかりきったことをもってまわったいいかたでふりまわす必要があるのか」と怒る人もこの世界には少なくあるまい。私も自分のそうした意見が常識であることはわきまえているつもりである。あるいはレコード鑑賞や賭けマージャン（私自身はできないが）に凝るなどおなじようなこと、要するに人間の日常的ないとなみの一つにすぎないと考えている。研究ということを何か特別に高級なことがらだと思ったり研究者という人間はそうでない人よりもすぐれた人間なのだと感じたりしている人をみると私は哀れをもよおす。いいかえれば、私にとって一番大事なこと、「命にもかえがたいこと」は研究ではない。だから、私は自分を学者だなどとは思ったことがない。私は熊さん八さんの一人だと思っている。

したがって、私にとって社会福祉研究所とは人間の幸福をもとめて集まってくる人々が、日常的にいとなみの一つとして研究をするところという意味をもつ場所である。

ＯＢやそのほかの研究所に関心をもつ方々のなかには、研究所の方向性が不明確なことや活動が活発でないことに不安を感じているむきがあるようである。しかし私は何の不安も感じない。一部の人が無理につくった方向性や、実力の伴わない背のびした活動は破綻するだけである。そうでない例もないとはいえないが、その例にしたがうことは私の体質にはとてもできないことである。

「桃季おのずから蹊をなす」という古人のことばが、社会福祉研究所の今後にはもっともふさわしいと確信している。

（はやさか・たいじろう）

「社会福祉」の夜明け前

所員　相沢二郎

私はまだ立教中学の生徒であった。日米間の空気が険悪なものになり、アメリカ人は次ぎ次ぎに日本を去っていった。当時の総長ライフシュナイダー先生も涙を流し、別れの挨拶を残し帰国して行った。そして１２月８日、戦争が始まった。

戦争が激しくなるにつれ、学生も動員されていった。学園の中にも学生の姿がまばらになった。このままでは立教大学も自然閉鎖になりかねない。時を同じくして、軍部が立教大学全ての建物の接収をする事が確定的となった。これが当時の情況であった。

昭和１９年１月、立教中学の校長帆足秀三郎先生が学監となり、三辺金蔵総長を授けることになったときのことである。帆足先生が私の父のところに見えられた。当時父は肺炎で寝込んでいたのだが、立教の窮状を打解する策を夜おそくまで話し合っていた。

そして出来たのが立教工業理科専門学校であった。現在の理学部、当時の予科生が入っていた建物にこの学校が新設された。佐久間教頭・下坂学生課長・県先生等なつかしい名前が想い出されるが、それはさておき、当時の陸軍部記者クラブの会長であった長滝武氏と連絡をとり陸軍の了解を取りつけ、文部省の認可をとるまで２ケ月と言うスピードで本校が出来た。工業理科専門学校が理学部となる経緯については、ここでふれる必要はないが、当時の学校より理学部に継続して残られた方は、佃先生と只野先生の二人のみであった。理科専があったからこそ、なんとか大学がつぶれずに維持できたことを忘れてはならない。

戦争も終った。その直後来日したライフシュナイダー先生は早速当時の学院理事長で校友連合会長の松崎半三郎氏と、副会長をしていた私の父相沢熙とを帝国ホテルによび、立教大学再建を謀ったのである。田舎に疎開していた父のステッキ代りに私もついて行き、数時間に及ぶ対談の席に同席できたのである。ライフシュナイダー先生が私が中学聖歌隊にいたことを憶えていて下さったのは光栄であり、先生への想出ともに忘れられない喜である。三人が何を話されたか、憶えているわけもないし、知っているだけ全てを書く事は不可能だが、おおよそのことは；

1. 日本国民は敗れたままの姿ではいつまでもいないだろう。
2. 立教はアメリカ聖公会ミッションからの大きな援助を期待できない。
3. これまでの立教はスモールタウンのカレッジだが、それでは経営が難しくなるだろう。将来は医学部・社会事業部を設けるべきだ。
4. 立教学院は自分で立ち上がることを考えなければいけない。アメリカは有形無形に後盾になるだけである。
5. 立教学院の使命は、キリスト教の教育を社会の中で自然に影響を及ぼしてゆくことである。学院が大きくなると一人一人の学生にそれを滲透させて卒業させることは困難かもしれないが、果さねばならぬ使命である。
6. 現在の立教は片輪である。経済や商科は直接キリスト教精神の実践につながらない。伝道も必要である。しかしキリストの心で社会の福祉を実践してゆく社会事業や医学部はどうしても立教のなすべきことである。

大体以上のような話で、５と６は相当つっこんだ話がなされ、ライフシュナイダー先生は何回にもわたって繰返し話されていた事を記憶している。

２０年経った今、各種の学部・学科が増設されてきたが、一番初めに造らねばならなかった医学と社会福祉に関するコースは今だにない。講座のみが社会学部にいくつかあるに過ぎない。不肖の子はそれをいかんともする事が出来ず今日迄来てしまった。

社会福祉コースの誕生

昭和22年菅円吉文学部長の時代である。淡路円次郎先生が文学部の中に社会学科をつくり、労務管理・文化事業・職業指導・社会事業の４コースを設けられた。それが学内の諸先生方とＯＢの協力で社会学部となり、淡路先生が初代学部部長に就かれた。

頑迷な文部省は社会学部の新設にあたって、基礎になる社会学科をつくらない限り認めないと主張し、応用社会学と応用心理学を中心とした各コースを学科にする事を止め、止むなく社会学科が出来たのである。発足当時、コースに考えていたものが学科に昇格をさせて行く構想を持っていた。この中で産関学科だけが実現したが、他は社会学科の中に一括されたままであった。

当然社会福祉は単独で学科となる資格が十分あるわけで、立教教育の本来的姿から考えればそれだけで一学部とならなければいけない使命を托されていると思う。

初代の福祉コース担当教授は森脇先生であった。やがて先生は文学部にもどってしまい、牛窪助教授もアメリカ留学に出てしまった。教授会は福祉コースを廃止することを決議したと聞いた。学校内がこんな風にぐらついていたので戸迷った学生が私と梶原氏に、「福祉は将来どうなるのか」と現状報告を訴える手紙をその年の3月28日よこしている。

私はさっそく教授会で廃止の決議がされた話を聞き、小山学部長の部屋に飛び込んでいった。皮ジャンパーと皮ズボン、どこの愚連隊が来たかと驚かれたと思う。礼を失していたことは承知だが、私の友人（非行少年）達が洋服、オーバーともに質屋にもって行ってしまったのでどうしようもなかった。とに角、立教大学における社会福祉学の重要な意義について一時間以上にわたりお話し申し上げた。小山部長もわかってくださり、松下総長もきっと同意見だと思うし、ご期待に応えられるように努力して下さると約束してくれた。

その后松下総長、小山部長、大内社会学科長、森脇先生、岩井学生部長に同文の私信を38年2月に出し、社会学科新設を請願した。とりあえず福祉コースとして残れるように決ったのが38年6月の頃と憶えている。

専任の教授が欠けている状態で、岩井先生に一年米国留学を願い、その間は梶原氏に講議を受持ってもらっていたわけです。岩井先生がもどられてから、ようやく福祉コースも軌道に乗り、社会福祉研究所も生れ、今後の発展を期していた。

途中学園紛争等もあり、全ての企画した通りにきたわけではありませんが、岩井先生を授けてきた大畠先生が亡くなり、今又岩井先生が神のもとに召されて、これまでの歩みも急拠ふり出しにもどってしまいました。

岩井先生は速水先生、桜井氏、岡田氏、また私にも、苦しい息づかいの中で福祉の将来を神に祈り、私どもに托されました。「学科にしておくべきだった」不平なき先生の唯一つの心残りの言葉として忘れられない響に今も私には聞えているように思われてなりません。先生は私事にこだわる方でなかっただけに、どうしてもこの言葉が、かってのライフシュナイダーえ総長の心を表わすものであり、さらには神が先生の口を借りて我々にだけでなく、立教大学そのものに語りかけ、お命じになった言葉ではなかったでしょうか。

福祉を出られたＯＢは勿論、立教を出て福祉の領域で働いておられる全ての方が、立教を母校として想い出すとき、先生の言葉をもう一度想起してほしいと思う。

立教創立百年を迎えようとしている今、建学の精神に基づいて、福音の伝道と実践と言う本学の本来的使命に向って立教のあり方を問うべきでしょう。

今年の正月でした、最初に社会学部をつくられた淡路先生を訪れ、岩井先生亡きあとの将来の指針についてうかがいました。「こと岩井先生個人の問題ではない。もっと眼を大きく開いて福祉を見るべきだ。福祉は全ての人・全人類の学であり、人間学として考え直す時にきている」と言われました。私の不明をつかれたお言葉として深く感銘してきました。

学園紛争のどこにキリスト教があったか。国立大学に右へならえの立教の何が母校と言えるだろうか。立教は立教なるが故に存在するのである。在校生や現職の先生のみの立教ではない。ＯＢとその歴史を持つ立教であり、神のある学校である。学校事業屋として立教を放置しておくことはＯＢの責任であり、全ての立教人を結集して伝統を活かし、栄光の立教たる本来の面目のために立上がる時である。

（あいざわ・じろう）

社会福祉と私

人間福祉の実現を求めて

所員　桜井芳郎

現代社会にみられる科学の進歩と経済の高度成長はもろばの剣として人間生活に科学性、合理性をもたらし、生活水準が向上する反面、人間の心からうるおいを奪い、自然は破壊され、公害が人間の生命や健康をおびやかし、生活環境の急激な変化にともない生活意識は影響をうけ価値観の多様化現象をうみだし、人びとの間に生活態度や価値意識の相違が目立ち、人間疎外や世代の断絶をひきおこしている。

育児に例をとるならば人間のパーソナリティの基礎は人間的な肌のふれあいや温かい感情の交流を中心とする親子の人間関係によって築かれ、情緒的成熟がはかられることがもっとも大切であり、しつけや習慣形成はその基盤のうえにうちたてられなければならないにもかかわら

ず高度に発達した現代文明はともすると合理的、科学的な育児法を強調するあまり、親子の情緒的関係の重要性を忘れさせがちである。

人間生活における情緒的関係の喪失は生命の軽視につながり、人間のもつ人間らしさはまさに失なわれようとしている。このような情勢からして現代社会に生きる人間のあり方があらためて問われなければならない。

現代社会に生きる人間のあり方とは一体どのようなものであろうか！

それは時代や文化の進歩に対応して人間の成長発展が期待できる人間生活を考えることから出発しなくてはならない。しかも、現代社会に生きる人間に望まれる人間像は世代や職業および性別を問わず、両刃の剣を用いて人間としての豊かな個性をのばし、可能性の限りなき開発によって自主的、創造的な力をそだて、“人類の進歩と調和”を基本理念として人間の尊厳と幸福が約束される社会を築きあげる英和のにない手におかれなければならない。

現代社会に生きる人間が“共に生きる”よろこびが感じられる人間生活を通して自己を最大限に発揮し、人間として成長していける世のなかこそ、“人間の福祉”が実現する世のなかであり、それをめざして医療と教育および福祉はすべての人間の人間的存在を保障する活動として統合されなければならない。

時あたかも「神と国とのために愛と正義の心」をモットーとする立教学院創立１００年を迎えるにあたり、“人間の福祉”をめざす立教大学社会福祉研究所の拡充強化こそもっともふさわしい記念事業の一つであるといえよう。

（さくらい・よしろう）

相談室案内

社会福祉ニュース 第4号 １３頁にあるものと同じもの
ただし電話番号は　９８５－２６６３

―相談室案内―

相談の領域	夫婦、親子など家庭内の問題、親族、男女間など人間関係の問題、人生の悩み 子どもの性格や友だち、学校のこと。 精神的な病気や性格のかたよりに関すること。
相談日時	毎週土曜日午前１０時から午後３時まで（予約制）
相談員	本研究所所員（医師、臨床心理家、ケースワーカー）
予約連絡先	立教大学社会福祉研究所相談室 電話　９８５－２６６３

× × × × × ×

―現場紹介―　所員 鵜沢立枝

虎の門病院は、急性疾患・特殊疾患を主に対象にしている「本院」と、慢性疾患を主に対象としている「分院」とから成り、M・S・Wは分院に常駐し、本院には出張する形を現在とっている。立教出身者も３名を数え、「患者」と呼ばれる人の福祉は、如何にあるべきかを追求すべく努力している。

現場で留意せねばならぬのは、「日常業務に流されて終る事のないように」と云う事であるのだが、ひどく多忙のため、なかなか捗らないが、分院では、疾病群がまとまり易い特質もあり、研究（稚拙ではあるが）も徐々に数を増すようになった。今後この方面の方々と資料交換等出来れば、と思い現在迄続いている研究テーマを御紹介すると、①消化性潰瘍患者の心理・社会的特性について（S43年より）、②人工透析患者の精神的問題状況について（S44年より）③慢性疾患が及ぼす老人生活への影響について（S46年より）④慢性肝炎患者の社会復帰状況について（S46年より）等である。M・S・Wは全くのサービス部門ゆえ、赤字のシワ寄せをまぬがれない。第二次社会福祉機関に於ける福祉機能の困難さを、ひしひしと感じる此頃である。今後ともよろしく。

―授業紹介―

Social Case Workの知識の概説と事例を通してSocial Case Work のApproachは、どうあるべきかを少しでも深く追求出来るようにしていきたい、と考えている。クライエントを理解するための人間に関する基礎知識については、受講生各自がテーマを選び、発表の中でSocial Work との関連で問題点を提起し皆で考え合う形式を組み入れている。事例研究を通して、「理論実践」の作業の中から、「人」の重み、自己の重み、Social Case Workの重みを少しでも多く感じとれる構えが出来上ってほしい、と云うのが私の願いである。

今春M・S・Wとして社会に出た卒業生に先日会った。話しによると、彼女等のおかれている現実は、かなり厳しいようである。彼女等の研修を兼ね、M・S・Wの勉強会を定期的に開けるよう努力したいと思っている。

（うざわ・たちえ）

私の研究テーマ

足立　叡

社会学および社会心理学という基礎領域に身を置いて、一方ではケースワークを中心とした社会福祉の方法に、同時に一方では対人関係や組織の問題に実践的関心をもっているというのが、いうなれば広い意味での私の「専攻」である。私が現在勤務する大学で、「ケースワーク」と「産業社会学」という、一見互いに異質のもののように見える講義を担当しているのも、実は上に述べたような関心の具体的なあらわれでもあり、いわば私なりの必然性があるのである。

たしかに常識的に考えれば、専門社会福祉の方法としての「ケースワーク」と、社会学の一応用分野としての「産業社会学」とは、少なくとも領域的には相異なる分野である。ケースワークは、社会福祉事業の実践への関心にもとづいた専門的技術（art）であり、他方産業社会学は、主に産業組織をめぐる人間の問題への学問的関心にもとづく一特殊科学である。にもかかわらず、私にとって、ケースワークと産業社会学とが結びつく、その問題意識の共通性とはなんなのか。そこで以下、この点について語るなかで、現在の私の研究上の関心ないしテーマに触れてみたい。

まず結論を先どりしていえば、私にとって、ケースワークを中心とした社会福祉の方法への関心と、対人関係や組織の問題への関心とは、互いに異質な二つの関心として切り離しうるような、したがって領域論的な意味でのそれではなく、それは共に或る方法論的な関心という一つの共通の根にもとづいたものである。そして私はそうした共通の根としての方法論的な関心を、現在「臨床社会学の方法論的研究」と名づけている。

人間の科学としての社会学の究極的関心は、あえて一言でいえば、私たち人間の「共同世界」（Mitwelt）の構造をそのあるがままの姿において把握することにあるといえよう。さらにまたその方法的特質は、人間現象としての社会現象への接近という点にあるといわれる。しかしながらアカデミックな社会学的思考の世界ではしばしば、本来のその関心とその方法的特質にもかかわらず、人間の「共同世界」への関心は具体的な生活主体としての個人を規定する「環境世界」（Umwelt）への関心として抽象化されがちであるといっても決して過言ではなかろう。そこではしばしば集団・組織と個人の対立という意識が方法論的に前提され、そうした前提自体がその研究上の深刻な壁となっているのが現状である。したがって社会学的思考を先に述べたその本来の関心と方法において生かすためには、そこに何よりもまず集団や組織というものに、一人一人の具体的な人間の問題として触れてゆくという、方法論的に臨床的な方向づけを必要とすることはいうまでもない。たとえば、組織と個人という抽象的（社会学主義的）な前提を一度カッコに入れ、個々の人間にとっての組織の意味を問うという視点にたち帰ることである。そのためには生きた人間そのものへの接近をめざす人間学への関心あるいは心理学や精神医学などにおける人間学的な行きかたに学ぶという作業が不可欠のものとなるであろう。そしてさらにみのがすことのできない事実としてそうした人間学的な行きかたは実は、フロイトやフロム・ライヒマン、あるいはメリー・リッチモンドといった実践的研究者に明らかなように、生きた人間や集団との対人関係的実践の世界と常に分ちがたく一つであったということである。

広い意味での社会福祉とは、基本的には一人一人の人間にとっての社会の意味を問い、そこでの人間の意味体験（自己発見）のプロセスにおいて社会の構造的更新（M．ブーバー）をめざす対人関係的実践の世界に他ならないと考えるなら、社会福祉の方法としてのケースワークもまた、ことにその方法論的基礎の確立が叫ばれている今日、社会学的ケースワークか心理学的ケースワークか、といった抽象的論議としてではなく、どこまでも対人関係的実践の方法としての原理的探究を必要とすることは、いうまでもなかろう。

そこで社会学を、ケースワークにおけるそうした対人関係的実践の過程を適格に受けとめ、さらにそこに学問的な方向づけを与える基礎科学としうるために、臨床的に方向づけられた社会学的思考とは何かを方法論的に探究することそして他方、従来アカデミックな抽象的思考で処理されがちであった集団や組織の問題に対しては、今度は対人関係的実践としてのケースワーク的接近をはかること、これが私の現在の関心であり、この二つはその探究においていわば表裏一体であるが故に、私において、ケースワークと産業社会学という二つの専攻分野を結びつける根としての問題意識なのである。

（あだち・あきら）

最近の実習生

横浜家庭学園　西沢　稔

全国唯一の民間女子教護院である当園には、年間数拾名の実習生がやってくる。今迄は後輩の勉強の場となればと思って、出きる限り受入れてきたが、最近になって出きるだけお断わり願っている。私のところだけでなく、教護院全体がその傾向にあることは同業者の集りでいつも話題になることだ。

何故だろうか。近年急激に増加した福祉コース、学生数、短大における幼稚園・保母両方の資格取得による不本意実習、未熟・無責任な実習指導担当者と教官不足、等いろいろ考えられる。極端な場合、収容施設を一度も見学したこともない教務課の事務員が発行する“実習依頼書”一本で、学生が施設にとび込んできたりする。故に私達が、既に大学で当然なされていなければならない“実習の心得”の指導から始めなければならない。こんな状態で施設に入りこむから、何をやって良いのか、なんのために来たのかわからない間に、期間がすぎてしまう。逆に適切な指導を受けなかった学生は、まるで役所の査察指導官の如く、事務費がどうなっているかとか、教育方針や、生活指導方針に批判を加え、近代化の説教をする者もいる。

これからの学生は、せっかく張切って実習にきたのに、自分の考えていた施設と違うということで、三日目に荷物をまとめて帰ってしまう。これらの学生をみるたびに、“学校側の教育は一体どうなっているのだろう”と思うのは、私一人のみでなく、我々業界の共通した考えであり、心配でもある。官公共の場合や、事務所的行政機関なら、これで過ぎてしまうだろうし、憎まれ口をきかずに目をつぶっていればそれで済んでしまうでしょう。しかし、私は収容施設側の受入れについての工夫もあることは別として、これからも数多くの学生が現場に実習に行くくであろう本校ぐらいは、関係者一同、もう一度慎重に考慮して、連絡を密にし、実習に入るためのガイダンスを充分にしてから施設に送り込まないと、意欲に燃えた学生をいたずらに惑わすことになりかねない。

この様なことがなくなるためにも、現場人としての私達を利用することは、無駄ではないと思う。

これを書いていたら、某大学生から電話があり、“先生、非行問題で卒論書きたいけど、なんか資料ありませんか”とのこと、施設実習だけでなく、こんな電話で悩まされるのは、梅雨の様にうっとうしいのである。

（にしざわ・みのる）

教育と福祉

所員　飯田忠道

社会福祉と言う言葉から直接連想できるものと言えば、○○施設とか「赤い羽根」である。社会から脱落し、見捨てられた人間をとりあげ或る意味で最も非生産的な社会の一部を考えている。

そこにあるものは本来宗教的なものかもしれない。しかし通俗的には修正資本主義的な余暇思考であり、生活のゆとりで考えたチャリティである。この限りでは社会福祉は慈善事業であり、福祉学を学問としてどこまで追求できるか疑問に思う。

見捨てられた精薄者、歪んだ非行少年のグループ、精神科病棟の廃人、生産性のない障害者、これら「クズ」とも言える人間の中で働く福祉者の得たものは何んであったか。それは今世紀最大の課題であったもの、人類にとって最も尊く、かつ意味のある発見につながる体験だったと私は思うのである。

文明の狂った進歩がもたらした人間性沙漠の時代、群衆の孤独であり、世代はズレ、総は神からも人からも疎外され、自然が遠のいている。これが昨今の社会であり人間の様である。

もっともらしい合理主義の仮面をつけた「狂った正常な現代人」に人間を問うているのが彼等精薄者であり、我々がそうみている異常者である。素材としての人間にまで立ちもどり、自分の全てを曝け出して、現代文明人の虚像に対決している。そこでは生命が探求され、根源的人間関心に遡る学があり、現代の故に誕生したとも言える人間の科学である。

最后に、教師である私が福祉研究所に何を期待し、どう関わろうとしているか、所員の立場で述べて置きたい。

学校も一つの社会である。その中で適応、不適応者のいるのは当然かもしれないが、学校は60点社会である。一般社会での不適応に比べるなら比較にならない者かもしれないが、それだけに問題があるとも言える。精神病院に行っても相手にされない、施設とも関係がない。だが問

題が残るところに問題がある。

教育生産の頭だけの末梢的作業で不具化され人間の断片で優等生と言われることに、完全に疎外されたもののみが発し得る問いかけがある。教育行為を通して人間の中に対立を生み出し、排他するもの、疎外することを行っている。教育福祉と言う言葉が許るされるなら、否定と吟味をそこに見つけることができるのではなかろうか。

もう一つの体験は、彼等（不適応者）と関わるとき、凡らく誰もが経験する、惹かれる気持である。この非常に不思議な魅力こそ福祉倫理であり、教育への力動となる人間尊重の体験である。

現在立教の小・中・高校の一貫体制の中で色々な問題を論じ合うグループがある。人間を疎外しない筈の教育が疎外する教育となっていることを吟味し反省している。研究所として、今後の問題はあると思うが、多分に未開拓な世界に向って前向きに取り組む努力をしてゆきたい。

（いいだ・ただみち）

× × × × ×

所員　長谷川　浩

私は、１５年間ばかり非行少年の鑑別に従事し、ここ４年ほど大学で生活をしていますが、かねて痛感していたことは、いわゆる現場と、研究・教育の場である大学とが、とかく別な世界として展開していることでした。大学には大学なりの興味と理論とがあり、現場には経験と試行錯誤から生れた技術があって、それらは所詮交わらぬものだ、…という言葉をよく耳にしました。それは単に非行問題だけにとどまらずあらゆる福祉の領域でも聞かれることのようです。

こんな思いに悩みながら鑑別技官をしていた頃、縁あって設立当初の福祉研究所に入れていただいたわけですが、その頃の新鮮な印象は忘れられません。それ以来今日まで、研究所を通じていろいろな人たちと交わり、私には得るところが大きかったと思います。これはただ、いろいろな職場、福祉の領域、福祉の現実の一端を知ったというだけではなく、話しのできるいろいろな人を知ることができた、という点に大いに意味があったと思うのです。

「××の研究」とか「○○の活動」とかのいわゆる華々しい成果をもたないこの研究所に、私はかえって魅力を感じています。成果は研究所自体の業績ではなく、ここに参加しているそれぞれの人が自分の生活（職業すべてをふくめて）のなかで、おのずと発現していくものだ、とも思います。この研究所を媒介にした諸体験が、それぞれの人の福祉活動の場面で生かされてゆくならば、我々の研究所は実に地についた活動をしていると言えるでしょう。また、今後ともそうありたいと思います。

なお、私は『社会心理学』と『演習――犯罪、非行の社会学的理論をめぐって――』を担任しています。前者は概論的なもので、後者は社会学的犯罪論を当面の素材としながら人間・家族・社会の問題を問いなおしてみようというものです。

（はせがわ・ひろし）

社会福祉概論

所員　相沢二郎

社会福祉という概念を規定して言うことは困難である。人間が生きている限り、より幸福な生活を望むのは当然で、そこに自ずから福祉がある。

学者は、福祉は補完であると言う。しかし、現場で働くものには説明になっても実感ではない。

精薄児の例をみてみよう。昭和30年頃まで、文部省は彼等のための特別学級をつくらなかった。当時は厚生省の基準に沿って、教育可能と認定されたものが精薄児施設に入所できたのである。文部省が特別学級をつくってからは、精薄児施設は重度の者のためとなり、ほとんど現在では重度精薄者のみが入所している。

現場ではどうであろうか。これからは施設に入れない最重度の子供をどうしたら教育できるかを考えているのである。

昔は医学が今程進んでいなかったため、最重度の子供は殆ど生きてゆくことも難しかった。現在では生きてゆけるのである。生存できる児童はそれなりの健康な生活、教育を受ける権利を持っている。

公害からの問題においても然りである。サリドマイド児が２～３才頃、その原因が厚生省の許可薬品のせいだと分かった。その時集った全国児童福祉司会の席上で質問に答えた当時の技官は何と言ったか、「サリドマイド児は交通事故にあったようなものだ。」これが当局の答えであった。

もし福祉が補完なら、一体これらの問題をど

う扱ってゆくのであろうか。本誌のたしか2号に重症心身障害児の問題を書いたが、補完と言う考え方からは乳児院に5才の子供を入れることは出来ない。

福祉は、日々起きてくる「福祉を疎外するもの」を発見し、それの解決策を考え、それぞれの分野に移管し、再び新しい問題と取組むのである。福祉の実践者は「人間福祉の絶えざる開拓者である」と私は定義する。

聖パウロが伝道のためにいくたの困難を克服して行かねばならなかったように、我々立教に学ぶものは、十字架のキリストを奉じるのである。キリストの教えを実践する者となるのである。又そのような学生のためにあるのが立教の教員の使命でもある。

故岩井先生が学園紛争で、響官隊と学生の間に大手を拡げて飛込んでゆかれたことは、キリスト教精神の稀薄になった昨今の立教に、尚キリスト者の健在を立証するものであった。

福祉は実践であり、経験が物を言う。今迄出された本の理論は現場の体験とかなりの距離がある。

福祉を学ぶ者は、自ら福祉の対象者側に入ってみて彼等の気持の幾分かに接することができるので、彼等と共にあることが学ぶ第一の条件である。危険もある。見学するだけでもよいから肌に触れる体験から学ぶものが福祉の学であることを強調したい。彼等は苦しんでいる、そして自暴自棄にすらなっている。理論や知識は単なる道具にすぎない。私は自分自身の体験から講議するようにしている。その実践的姿勢を解明するところに福祉哲学は生きるだろうし、学生の学んでほしいところもその故である。

（あいざわ・じろう）

社会医学と人間福祉

所員　江口篤寿

アメリカの社会医学者ガルドストンは、その著書「社会医学の意味」の日本語版（中川米造訳、法政大学出版局刊、1959）への序文の中で『どうしても述べておかなければならないことは、“病気の征服”に多くの業績を挙げている間に、その同じことが、良い健康のためにはなっていなかったのです。もっと端的にいえば、病気の予防や治療のそれ自身の必然として幸福を育てるものとはならないのです。』と述べている。

彼の言葉に端的に表わされている「医の本質がもつ矛盾」に対して、医科学、社会・人文諸科学からのアプローチがなされなければならないと考えているが、人間福祉の基盤に立った保健医療活動も、この矛盾解消の一端を担うものであると信じて、この問題にとりくんでいるつもりである。

本務は立教学院診療所医師として、立教小学校から大学までの構成員の健康管理を主な業務とし、あわせて週2日だけ診療を担当している。また社会学部非常勤講師として本年度担当の講義は「医学知識」「健康管理論」「社会福祉演習」であるが、演習は履修者がないため、代りに自主講座「小児の心身発達」を担当している。なお後期は文学部教育学科で「小児保健」を講義する予定である。

「医学知識」では、主として医療福祉、心身障害福祉領域へ進む人のための医学概論的なものを講義している。

「健康管理論」は今年度から新しく設けられた講義である。集団における人間関係を健康現象という側面から捉えるとき、集団はその目的機能遂行のためには生物学的弱者を排除しようとする傾向が少なくないようであるが、生物学的弱者を社会的弱者へ転態させることを防ぐこともまた、健康管理の枠組の中に入れなければならない。現在、学校の構成員の健康管理を本来の職務としていることから、このような人間福祉の視点に立った健康管理の実践と体系化を試みているので、この体系に関する序説の提示のつもりで講義を行なっている。

自主講座は、小児の精神・身体両面の発達に関する知識を学習する目的ではじめたもので、現在、イリングワースの「乳幼児の知能・身体の発達」をテキストとしているが、これは昨年末から有志の学生といっしょにはじめた「心身障害の医学」の勉強会の連絡とみてよかろう。希望者の参加を歓迎する。

（えぐち・あつひさ）

お知らせ

近藤倬司氏（東京都民生局）および飯田忠道氏（立教高等学校教諭）のお二人を当研究所所員にお迎えしました。また所員の西村哲郎氏は立教中学校校長に就任されましたので、研究所顧問をお願いいたしました。

研　究　所　と　私

横浜市中福祉事務所　小山誠一

昨年１２月に転勤となり一般居住地区より横浜の中心に位置する簡易宿泊所（いわゆるドヤ）地区を担当するようになってからの６ケ月を振り返って考えてみました。

“ドヤ地区”その言葉を聞くとあの山谷や釜ケ崎のようなと思う人が多いと思います。日々接する人々も前の職場とは全く異なり、所内も一日中ざわつき、対象者のあのアルコールの臭いは避けることは出来ないし酒のいきおいでの大声、訪問すれば日中から道路上で酔払ってゴロゴロしている姿を見るとこの街に住んでいる連中はやはり違うのかなと思いがちです。正直言って最初はとまどいました。

保護を実施するにも対象者との力関係で決めるということもあるようです。しかし６ケ月間がすぎてふと考えた時にこれで良いのかと思わざるを得ないのが偽わりのない気持です。ともすると対象者がいても関係なしに事務的に決定しているような気がしてなりません。社会福祉の職場において対象となるべき人がいなくて何が福会福祉かです。

確かに他の福祉事務所と比して相談・申請者数も多く大変ではありますが、対象者の処遇をワーカー側の主張で通しがちで日々これで良いのかと自問自答しています。良く言えば対象者と同じ位置で対処しているとも言えますが、やはり力関係で負けずにやってやれという気持が強いようです。

扶助費を受給すると自分の病気も考えずにすぐ焼酎をのみ、病気を治す気持があるのかないのか、居所不明になったりで落ち着かない毎日ではありますが社会福祉にたずさわっている人間の常に忘れてはいけない何かがあるように思えてなりません。

職場の忙しさ、対象者の日常生活状況等を先に考えて、あるであろう本来のワーカーの姿がなくなりそれこそ事務処理屋で終ってしまいそうになります。何とかそれを打破っていきたいと思います。

現場にいると、ともするとその中にうずまり込んでしまいがちです。そんな時に現場から一歩外に出て、現場にいる自分とは違う自分の眼で現場を振り返る場所と時間を社会福祉研究所に求めたいと思う。　（こやま・せいいち）

私の履歴書と仕事について

粕谷美智子

今まで一手に研究所の仕事を引き受けていられた横山さん、ご苦労様でした！

２月から、私が担当する事になりましたので先輩の皆様！よろしくご指導くださいね。

私と「福祉」とのであいは、２年生の時、故岩井教授、早坂教授と両教授の授業から、キリスト教に基づく人間福祉を教えていただいた事からなのです。「福祉」を知る事により、自分の短所に気づくという貴重な体験を得、また、「福祉」はいつも新鮮さを感じさせ、大きな空気な似たもので包んでくれる。

人々を、知らず知らず「福祉」に関心をもたせ、情熱をもたせる魅力があるのです。

私も、専門課程での「ケースワーク実習」を相沢所員がその頃おられた川越児童相談所でさせていただきました。その実習ではおどろくばかりでした。いきなり相談業務をやらされ、余りにも私が育った環境とは違ったもので、人間のみにくさ、きたなさをいやと言う程感じました。そして、そこに愛の手をさしのべていくと言う事を学びました。

卒業すると同時に、家庭児童相談員として、一つの市をもたされ、市に対してのＰＲという第一歩から建設をはじめ、相談業務や精神薄弱児のグループ・セラピー（集団治療）と活動し月一回の埼玉県家庭児童相談員「事例ケース研究会」で問題を出し合い、とことんまで検討した事がより良い勉強になったのですが、なかなか思う様にいかず、何回となく、途中で辞められるものなら辞めたいと考えた事もありました。そんな時、いつも、故岩井教授、スパーバイザーの相沢所員がいらっしゃるだけで、なんの言葉上の援助を受けなくても大きな力になってくださったのです。研究所も、現場で働いている人々に安らぎを与える場所だったのです。在学生の時、ＯＧの時と一歩遠くから見ていた私が研究所の仕事をまかされているのです。その内容は、想像していたのとはちがい、①研究所の事務処理（会計～図書整理）②所員の方の講義で必要な資料と連絡、③ニュースの作成、④所員会・研究会の連絡と報告、⑤個人的には学生たちの話し合い等と一つ一つの仕事に責任があり、時間をかける必要性があるものなのです。

これからは、事務的には今やっている仕事を

小さな事でも、誰にでも理解できる様にノートにまとめ、資料として綴って行く事、どんな忙しくても明日にもちこまない事、また、研究所に訪れる方、電話を掛けてくださった方には言葉を大切にし、いつも明かるい気持で応待すること、当り前の事でも忘れがちである事から目標において一歩成長して行く事を望んでおります。

一人で何でもやっている私にとって、親切に教えてくださった先生方、総務、教務、学生部図書館等に本文をもって日頃の感謝の気持をお伝えいたします。　（かすや・みちこ）

私のＩＰＲの関わり

若　月　美和子

ＩＰＲ研究会の活動である、トレーニングに参加してから、もう一年になろうとしている。私とＩＰＲとの何らかの関わりがそこに始まって、今に至っている。（正確に言えば、それ以前の早坂先生との出会いから続いて来たように、私には思える。）にも拘らず、ＩＰＲについて書いて欲しいと言われても極めて難しいと思うのだ。

ＩＰＲとはInter-Personal Relationshipであり、対人関係と言われるが、この言葉自体日常、非常に曖昧に、あるいは誤って使われている。また、一般のＳ・Ｔ・（sensitivity training)に対する偏見や誤解、そして、人間の福祉における基本的態度の問題もあると思われる。私自身、ほんの最近まで、対人関係、人間関係と気軽に口にしながら、そのことの真に意味するところもわかり得なかった、と思うと、すべて他人ごとではない。それは福祉についても同様である。「福祉」というと、施設とかハンディを持った人々という、ごく狭い限られたもののようでしかなかった。確かに、それらは極めて重大であり、決してそれから逃れることの出来ない多くの現実を私達はかかえて行かなければならない。しかし、そういう福祉の対象が重要であるのと、全く同じに性、年令、職業、地位を問わない個々の存在が、見えない痛みを背負いつつ、生きられないでいる人々が、何故大切にされなくて良いのだろうか。真の福祉はすべての人々にひらかれている。そして、まさにそのことが、真の福祉へと還元されるのではないだろうか。現に、ＩＰＲでは、ナースから学生・教師・カウンセラー・一介のサラリーマンから社長までと幅広い。そして、Ｔを経て、またそれぞれの現場へと帰って行く。自らを生かし、人と共に生きるために。そのメンバーも既に２００名を越えている。

「自分を大切にすることは、他人を大切にすることに通じ、自分自身を愛せずして、他人を愛することは出来ない」私流に言えば、人は孤独であると同時に孤独ではないのであり、この両義性こそ“人間は関係的存在である”という真の意味ではないだろうか。そして、それは言葉や知識で学ぶ以前の、より深く、より尊厳に個人に根ざした生命を感じとるところにある。その言葉ではなく、言葉に秘められた命を感じ伝えること、あるいは伝えようとするところにある。これが、人として、人と共に生きる出発であり、福祉における基本的態度へと通じるのである。そういう自己を開放して行くなかにしか、真の自己発見はないし、絶えざるcreativeな生もないように思う。

一昨年の末から始まった、ＩＰＲトレーニングも、次回で第７回を迎かえる。さらに、今年の６月には、前回までのメンバーのなかからの強い要望のうちに、「日本ＩＰＲの会」が発足した。同窓会及び継続的トレーニングを目ざすこの会は、２泊３日の第１回合同セミナーを開催するに至った。

多くの問題をかかえつつ、一歩一歩あゆむＩＰＲの活動の、その一端を支えていると自負し、常に新たな心で、全力投球を惜しまない諸先生方、そしてメンバーの一人一人と共に、学びつつ生きることの素晴しさを思う。そして、絶えざるcreativeのなかで、自己を実現して行きたいと願っている。

（この４月から、早坂研内ＩＰＲ研究会事務局に勤めております。今後ともどうぞよろしく、お願い致します。）　（わかつき・みちこ）

研究所諸活動

相　談　室　よ　り

村　山　恵美子

昨年末に岩井先生が亡くなられて早半年、悲しみを思い出すようではあるが、あまりにも急に逝去されたことは、相談室にとってもいつも身近にいてささえてくださっていた力を失ったようであった。というのも、生前、岩井先生には直接ケースを受け持っていただくことは少なかったが、相談室の運営等に関しては、早坂先生と共に常に細部にわたって心を向けて下さっ

ていたからである。

その后はすべてを早坂先生にお願いしてきたわけであるが、幸いにも特に支障をきたすこともなく続いている。また、ケースに関しても、相談を受け持つスタッフがそれぞれの場で、それぞれの領域での仕事を持っている為に、余程専門を必要としない限り、現状はどうしても研究所にいつもいらっしゃる早坂先生に頼ることが多くなってしまっていた。

しかし、この点については、今年になって平木先生が所員になられたことから、相談所としてもケースを受け持っていただくことが出来るようになり、御多忙の中を最近ではずいぶん協力をしていただいている。

今後も相談室の身近な力として、よりいっそうの御協力をいただけるものと思う。

ケースとしては、今年になって4ケースという状況で、内容も、これまでと同様登校拒否の問題が多いため、今回はケース例をあげることは控えておく。

今後とも、皆さんの御協力、御意見をどしどしお寄せ下さい。

（むらやま・みちこ）

「おつとどつこい ボランテイアビューロー」

荻原俊夫

それこそちょっとボーリングに行くと同じように、気軽に福祉活動に、多くの人が参加できないものか。各自の生活の枠をさして出ない範囲で、ほんの少しでも、他人の問題状況の中にお互いが関って行く、そんな活動ができないものかと念願しながら発足したボランティアビューローでした。その根本は、あくまでも個人の自由意志に依る自由な活動ということでしたから、活動がなるべく限定されることはないように、またできるだけ組織化されないようにという申し合せがありました。しかし、自由なといっても、今の世の中に、何ものからも規定されずに行動することは困難なことであり、ましてや始めようとする当人に何も用意されていない状況ではモットーの気軽さがすぐ消えてしまいます。

それでも、まがりなりでも4年ほど活動を続けてきました。いつでも、まだ出発したばかりの感は避けられないのですが、ビューローは今大きな曲がり角に来ているようです。

今迄の活動を振り返ってみますと、大体三つの時期があったと思います。

1. 一人一人が持っている活動の動機をうまく導き出して、それを実践活動に結びつける。ビューローの本来の役割である情報センター的活動を始めようとした時期
1. 実際の活動に入った段階で、どの分野でもある程度、それに必要な知識と経験が求められ、ボランティアとしての幾分かの専門が必要になった時期
1. どのような個人に関っても、その問題状況は必らず社会的背景を有していて、否が応でも、活動が広く、深く、そしてじっくり根づくものでなくてはならなくなってきた時期

誰も専門家ではなく、全くの素人が行く先解らず始めた活動ですから、今迄経てきた過程は参加した一人一人の経験の過程でもあった訳です。そして第三の時期にさしかかって気易い筈の活動が真剣であればあるほど、抜き刺しならない深淵に入り込んでつい気の重い状況になってきてしまいました。そういうことは、当然予想できたことで甘い甘いと批難してしまってボランティア活動のユニークさが失われてしまいます。

今年に入ってから、中心になって活動していたO氏が遠隔の地に就職したこともあって、しばらくの間、活動が途絶えてしまいましたが亡くなった岩井教授の過大な期待を各自が後めたく意識していましたので何とか活動を復活しようと、5月に久しぶりに会合が持たれました。その場で話され、そして、現在、実践されている活動は次の通りです。

1. 卒業生が多くなり、連絡が途絶えがちになっているので、毎月1回在学生とO・Bとの連絡定例会を開く。（毎月第1水曜日）
1. 卒業生は各自の職場をビューローの支部とし、そこで新しい参加者を呼びかける。
1. 活動資金が微かしか残っていないので収益事業をする。現在パンティストッキングのセールスをしている。
1. 心身障害に関心がある者が多いので、長島氏を中心に行われている『久恵ちゃんの問題を考える会』にできるだけ協力して行く。
1. 重症児センターへまた他施設へのヘルパー的活動を続ける。
1. 地元の豊島区の小学校の校庭開放の運動を進める。

1. 新しく病院に長期入院している児童のグループワークをして活動を始める。
1. 横浜市の民間精薄通園施設の設立に協力して行く。……等、多彩な活動を展開したいのですが、現在は大体の通りですけれども一つ一つの実践を通して、今迄積み上げられてきた、実績の先を行く新しい世界が開ければと願っています。

ボランティアでの実際で感じていることは、問題に深入りすればするほど浅薄な関り方が禁物になってきますが、当の問題保持者の側の世界と一般の人の世界との交わりによって、問題告発の姿より障害者などが、その状況をさほど気にしない人間関係の風土が少しでも形成されればと心しているのである。

今は、全てのことが「あっしにも関り合いがあるようでござんす」というところですが、できたら「あっしには関りがないことでござんす」とさりげなくボランティア活動に参加できるようになればと思っている状況です。

『ボランテイアビューロー』

平岡令子

46年度の末には、ボランティアビューローを存続させるかどうかが、ひとりひとりのビューローへのかかわり方とともに問題になりました。そのため何回かの話合いの機会を持ちましたが、47年度になってからはメンバーの行ういろいろな活動の連絡の場として、相互関係のために必要な場として、実際に機能しはじめています。

現在の主な活動をひろってみますと

◎重障児センターと桐花学園で「動く重障児」の療育活動にボランティアとして参加し、児童指導員のもとで、通園の子供たちとかかわっています。
◎施設の絶対的な不足のため精神病院に入らなければならなかった子供の実例を知って生れた「久恵ちゃんの問題を考える会」ガリ版刷りのニュースを毎月一回発行しています。
◎池袋第一小学校で校庭開放の指導員として地域の子供たちと交流しています。

現在のメンバーは約20人です。さまざまな場での活動を通じての問題意識や方法の問題から共通の基盤を見つけながら、相互の関係を作り上げてゆきたいと思っています。そのような意味でゆきたいと思っています。そのような意味からも毎月一回第1水曜日の夜、卒業生との交流会を行っています。自発性に根ざした活動を行うひとりひとりの個人にとって、ビューローがどのような場、または集団であったらいいのか、集団としての方向性はどういったものなのかはまだあいまいな形で存在しています。ただ開かれた運動体でありたいというのはメンバー共通したねがいであるような気がします。

社会福祉研究会の報告　（第1回）

（日　時）　47年6月17日（土）午後2時30分～5時
（出席者）　相沢、長谷川、江口、西沢、徳池、岡田、松本、村山、金井、明星、伊能、間、矢頭、三輪、笹本、粕谷

「はじめの言葉」　長谷川所員より

今までの家族研究会は家族の問題を前提にしていたのをもっと大きな範囲で種々の福祉機関にかかわっている方、福祉に興味のある学生たちで真の福祉と言うものについて話し合う機会として実現していきたいと思います。

話題提供者　松本氏（東京都七生福祉園）

∘ケースポイント　家族における精薄児の位置
∘話し合ったこと
1. 相談所、施設を訪れる前の段階（経路）が大切ではないか。
　① 精神薄弱児と家族との関係
　（家族内での精薄児についての葛藤、あせり等）
　② 家族と相談所
　（家族がこのまゝ精薄児を家庭にとじこめているのは困ると思って相談所を来所する）…相沢所員に現状を話していたゞく。
　③ 相談所と施設
　（施設適応、規準の問題）
　各施設での受け入れ体制、面接、指導方法、試みを出席した方々と話し合う。
2. 七生福祉園の実験的試みを紹介
　（外出の時指導一人と精薄児二人を限則として、生活指導として各自バスの料金、買物等の支払いをさせている。又、学園内でトラブルを起した場合には心理劇スタイルで本人たちに再現させる等）

∘毎月第3土曜日に予定する。会費は出席者のみ50円を支払うことを決定する。
∘次回は7月15日（土）午後3時～5時
　話題提供者　金井氏（都立身心障害者福祉センター）
　テーマ　「重度心身障害者の社会復帰」

（粕谷　記）

第4号の訂正

14頁研究所スタッフ紹介欄で、研究員　服部実を服部健に、金井氏の所属を（都立身心障害者福祉センター職能訓練課）に御訂正下さい。

あとがき

社会福祉ニュースは、研究所と福祉の現場をつなぐ媒体としての役割をもつものと考えているので、研究所の現状報告をのせる予定であったが、頁数の都合で割愛し、次号に掲載する。なお、今年中に少なくとも、もう1号だけは発行の予定である。　（江口　記）